

## 医療の質・安全学会 第7回「新しい医療のかたち賞」の受賞者と受賞理由

### ① 患者を中心とした取り組み部門……ペイシェントサロン （代表・鈴木信行さん）

<http://www.kan-i.net/patientsalon.htm> Eメール：[info@kan-i.net](mailto:info@kan-i.net)

鈴木信行さんは、1969年生れ。生まれながらの二分脊椎で下肢麻痺と膀胱直腸機能障害があり、身体障害2級。歩行が不自由なだけでなく、排泄の感覚をもつことができない身です。その鈴木さんを精巣腫瘍が襲ったのは、20歳のときでした。24歳で再発。幸い、抗ガン剤が功を奏し、工学院大学電子工学科を卒業、製薬会社の研究所に13年間勤務しました。このような体験の中で、医療者だけでなく患者側も医療に対する意識が変わっていないこと、主治医任せの言動やコミュニケーション不足が後を絶たないことを痛感。2011年、ペイシェントサロンを立ち上げました。

これまで催した23回の平均参加人数は12.7名、参加者の58.7%はリピーターです。医療系学生や卒業生もファシリテーターとして参加することで、場づくりの経験をするとともに、患者の生の声を聞けるよい機会になっています。



気楽な雰囲気の中で学べるように、喫茶店で開き、飲み物やケーキを口にしながら進行します、互いに、呼ばれたい名で、「〇〇さん」「〇〇ちゃん」と呼び合うなど、リラックスできる環境作りも工夫しています。

話題提供者の職

種は、医師、看護師、薬剤師、社会労務士、MSWなど様々。単なる講演会ではなく、ディスカッションを深めることで、気づきが広がることを目指し、当日の話をもとにテーマを設定、2グループに分かれてスモールグループでディスカッションをします。さらにその内容を共有することで、参加した患者には新しい気づきを得るだけでなく、参加者同士の交流が生まれています。

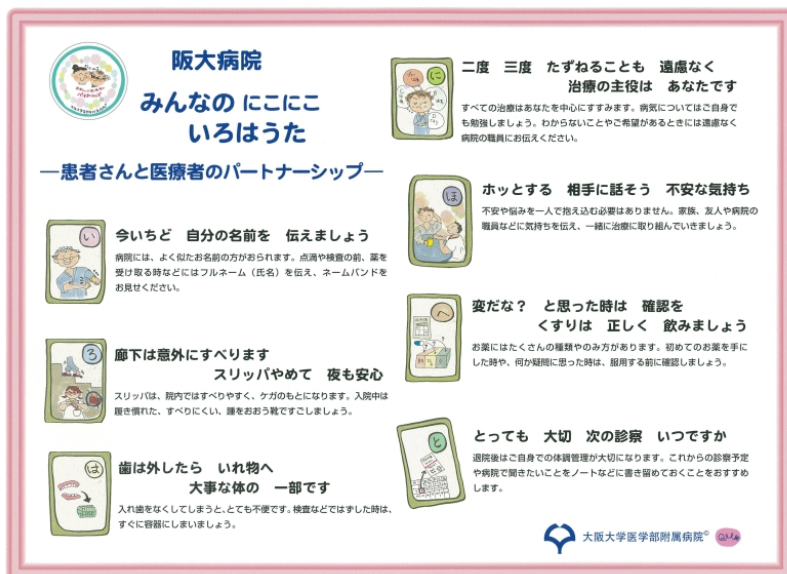
来年からは、ペイシェントサロン運営講座を開催し、各地の喫茶店、病院や薬局の待合室などを活用し、活動の拠点を増やしていく予定です。

鈴木信行さんは、患医ねっと代表、みのりC a f e代表、NPO 法人患者スピーカーバンク理事長もかね、患者経験者ならではの活動を展開しています。

② 医療者・医療機関を中心とした取り組み部門……「いろはうた」による医療安全への患者参加の取り組み（大阪大学医学部附属病院中央クオリティマネジメント部）

[https://www.osh.jp/partner/activities/syousai.php?pic\\_sn=111](https://www.osh.jp/partner/activities/syousai.php?pic_sn=111)

2010年6月から始まった患者参加プログラム「いろはうた」は、医療安全に患者も参加してもらうための取り組みです。入院患者に協力してほしいポイントを「いろはにほへと」の各文字で始



まる7つの句にまとめ、親しみのあるイラスト付きの7枚のかるたと一緒にA4サイズのファイルに印刷して、看護師が一句一句、その意味を説明して患者や家族に手渡しています。「医療安全は医療者が取り組むもの」と考えがちですが、患者の意識も変われば、安全性は高まります。患者と医療者のパートナーシップ（協同）を目指すこうした取り組みは国内だけでなく、海外からも注目されてい

ます。

「い」は「今いちど 自分名前を 伝えましょう」です。病棟などでは医療者が「山田さんですね」など患者の名前を呼んで確認することがありますが、患者は名前を正確に聞き取れなくても、うなずいてしまう恐れがあり、1999年1月には横浜市立大病院で手術する患者を取り違える事故の一因になったこともあります。ただ医療者が病室などで「お名前をおっしゃってください」と求めると、患者は「名前も分からないのか」など不安に思うかもしれません。しかし、入院前に患者からフルネームを伝えてもらう意味を伝えておけば、患者は余計な不安を抱えず、理解して医療安全に協力してもらえます。かるたでは、自分の腕に巻かれたリストバンドを指し示すイラストも添えられ、分かりやすくなっています。

「ろ」は「廊下は意外にすべります スリッパやめて 夜も安心」です。病院内で起きる事故は治療中だけではありません。入院生活で足腰が弱っていると、スリッパだと脱げやすく、夜にトイレへ移動する際に転倒することもあります。いろはうたでは、スリッパの危険性を伝え、イラストではかかとのある履物を使うように求めています。

いろはうたは同病院で医療安全の担当をする中央クオリティマネジメント部が作成しました。病院の全職員に周知し、患者にも分かりやすくするために「患者さんと医療者のパートナーシップ」と書かれ、いろはうたと同じイラスト付きの丸いバッジを医師や看護師だけでなく、警備員や院内のコンビニのスタッフまで着けています。患者にアンケートしたところ、一番好評だった句は「に」の「二度三度 たずねることも遠慮なく 治療の主役はあなたです」でした。患者や家族からは「バッジをみると、病院全体で取り組んでいることが分かり、気軽に声をかけやすい」という声が聞かれます。

取り組みは海外でも注目され、同部のホームページには英語、中国語で説明したいろはうたも公開し

ています。中島和江部長は「いろはうたの内容を知ってから治療に積極的な関わりをしたいと考えるようになった患者も増えています。医療安全には、患者の参加も大切なので、多くの病院に広がってほしい」と話しています。

③ 地域社会の取り組み部門……大牟田市認知症ケア研究会（代表・大谷るみ子さん）

「まちで、みんなで認知症をつつむ～大牟田市地域認知症ケアコミュニティ推進事業～」

認知症の91歳の男性が、踏み切りに迷い込んで列車に跳ねられ亡くなった事故をめぐり、名古屋地裁が遺族に対し、「損害賠償金720万円をJR東海に支払うように」と命じました。「認知症の人は閉じ込めておけというのか」と大きな社会問題になる中、注目されたのが、福岡県大牟田市が続けてきた「まちで、みんなで認知症をつつむ」挑戦でした。

大牟田市は、熊本県との県境に位置する旧産炭地。12万2623人のうち65歳以上は3万8803人、高齢化率31.6%と全国でも有数の高齢化のまちです。

そこで、認知症になっても、どんな障害を抱えても、誰もが住み慣れた家や地域で安心して豊かに暮らし続けることを目的に、2002年から、認知症ライフサポート研究会と大牟田市の協働の取り組みが始まりました。

この事業は 1)デンマークに学んだ「認知症コーディネーター」の養成研修、2)もの忘れ予防・相談検診と認知症予防教室、3)認知症サポーター養成研修／子どもたちと学ぶ絵本教室、4)ほっと安心ネットワーク（徘徊模擬訓練と地域づくり）、5)地域認知症サポートチーム、6)認知症家族介護者の会、7)若年認知症の本人ネットワーク・フレンドシップキャンペーンの7つの中核事業で構成されています。

中核をになっているのは、認知症コーディネーター養成研修を修了した人材です。これまで85人が2年間の研修を修了し、同じ理念・知識を共有した仲間になっています。この修了生を含め認知症支援のスーパーバイズができる人材6人と認知症の専門医6人がチームになり、困難なケースの助言や各種事業のスタッフとして取り組む「地域認知症サポートチーム」を組み、変化するご本人や家族に関わり、医療と介護の両面から助言をしています。

検診から始まり、予防教室や本人、家族を支援するための集い等、ステージに応じた社会資源をこの10年間で整備してきました。子どもの頃から認知症について学ぶ「絵本教室」や徘徊模擬訓練にも取り組んできたことで、最近は、子どもたちが地域の一員として道に迷っている高齢者を見つけて助けるケースも相次いでいます。

